

【資料紹介】

絵画学習としての模写 ―令和6年度収集「片桐文邦資料」から―

小川 陽子

はじめに

上越市立歴史博物館では、令和6年度に新潟県上越市にゆかりのある日本画家・片桐文邦の遺族から資料の寄贈を受けた。寄贈された資料は、それぞれ片桐文邦自筆の掛軸2幅、画譜の模写や風景を描いたものをまとめた冊子4冊、本画制作を意識して描いたと考えられる習作の捲り7枚、落款印2個である。寄贈資料の整理作業を進めていくなかで、冊子状に綴じられた3冊に描かれた構図が文邦オリジナルのものではなく、画譜を模写したものだとは判明した。本稿は、寄贈資料の紹介も兼ねて、これら3冊の資料に描かれた画題について紹介するものである。

1 片桐文邦について

片桐文邦の画業については、美術史上の先行研究が少なく、出自についても出典が不明な場合が多い。これまで、上越市にゆかりのある美術作家の展覧会でも取り上げられる機会がなかった。上越市で文邦のことが取り上げられるのは、オーストリア＝ハンガリー帝国の軍人・テオドール・エドラー・フォン・レルヒ（1869-1945）との交流に焦点を当てたものがほとんどである。レルヒは日本で初めてスキー指導をした人物として知られており、上越市は「日本スキー発祥の地」と全日本スキー連盟から認定されている。

レルヒは軍事視察のために来日し、明治44年（1911）1月5日から翌年の1月24日まで高田の陸軍第13師団に配属された。日本スキー発祥記念館では、絵を描くことを好んだレルヒが描いた妙高山などの水彩画を所蔵している。文邦とレルヒは絵を描くという共通点もあって打ち解け合い、交流を深めた。

文邦の略歴については、池墻忠和氏がまとめた『レルヒ少佐一心に残る高田の友人たち―』のなかに「片桐文邦」の項目があり、そこでは次のとおり記されている¹。

文邦のフルネームは「片桐文邦」という。明治十四年、現在の柏崎市安田に父・幸七、母・リイの長男として生まれた。本名は幸吉。

素封家に生まれた文邦は、幼少のころから画筆を持って遊び周りの人々は天才との思いから仕切りに京都行きを勧めたと言う。京都では最初に四条派の森川曾文（一八四七～一九

¹ 池墻忠和「(五) 片桐文邦」(『レルヒ少佐 一心に残る高田の友人たち―』私家版、2018年) 33-34頁

○二) に師事し、のち一門の長谷川玉純(一八六三～一九二一)に学んだ。女流画家として名高い伊藤小坡(一八七七～一九六八)も曾文に師事したので、年代的に言って両者は、知り合いであったかも知れない。いずれにしても、画号である文邦の「文」は「曾文」の一字を授かったのでは、と想像している。

また、新潟県全域にわたって、日本画・洋画・書の分野で活動した江戸時代から昭和時代の物故者の略歴を地域別にまとめた『越佐書画名鑑』には、「片桐文邦」についての記載が見られない。代わりに一字違いの「片桐文畝」という人物の項目があり、柏崎市と新潟市に2人の日本画家「片桐文畝」の略歴が記載されている²。柏崎市の項目に記載されている「片桐文畝」は、「明治十五年(一八八二)ころ、刈羽郡安田村に生まれた。京都で長谷川玉順に師事して、日本画を修めた。大正九年(一九二〇)、三十九歳で没した。」と紹介されている³。一方、新潟市の項目に記載されている片桐文畝は、「明治十四年(一八八一)に生まれ、名を文之助といった。荒木寛畝に師事して、日本美術協会展・日本画会展・美術研精会展などに出品した。没年不詳。」と紹介されている⁴。

池墻氏の研究成果を踏まえれば、刈羽郡安田村(現在の柏崎市安田)という出身地や京都で長谷川玉純(『越佐書画名鑑』には長谷川玉順と記載されている。)に師事したという師弟関係、没年が39歳であることから、本稿で紹介する「片桐文邦」は柏崎市の項目に記載されている「片桐文畝」に該当する。

前述したとおり、同年に同じ新潟県に生まれ、同じ雅号で活動した日本画家「片桐文畝」が存在したことになり、雅号の重複を避けるためか、「文邦」と名乗るようになったと考えられる。また池墻氏は、「文邦が森川曾文に師事していたことから、文邦と伊藤小坡が知り合いだったのではないかと推測した上で、同じ論考の別箇所「明治四十四年九月に京都の伊藤鷺城と皐月木芙蓉が片桐文邦を訪ねに高田にやってきた。早速九月十日に寺町長遠寺において面識画会が催され、文邦は発起人の一人となって世話にあたった。同会にはレルヒ、堀内連隊長、後藤経理部長など五十余名が参加したと言う」と『高田新聞』の記事を紹介している⁵。

池墻氏は『高田新聞』の記事の概要をまとめて紹介しているが、元の記事からは他にも読み取れる情報が多いため、該当記事の全文を紹介する。

【史料1】「兩畫伯面識畫會」『高田新聞』第8883号(明治44年9月11日付)

「谷口香嬌(原文ママ)高弟にして今は京都寫生派の重鎮と呼べる伊藤鷺城及び故岸竹堂に學ば後ち竹内栖鳳の門下に入り清國を遍歴し、歸京の後畫面に新趣を現はして花鳥山水等を能くする皐月木芙蓉の兩畫伯は今回當地の片桐文邦氏及び今井重三郎訪問旁に來遊

² 荒木常能編『越佐書画名鑑』第二版(新潟県美術商組合、2002年)

³ 前掲書 註2「片桐文畝」62頁

⁴ 前掲書 註2「片桐文畝」102頁

⁵ 前掲書 註1 41頁

に付阿部部長杉本直形、片桐文邦今井重三郎諸氏を始め其他有志の發起にて十日午前九時より寺町長遠寺に於て面識畫會を催はしたるが出席者五十餘名にして堀内少將、レルヒ少佐、後藤經理部長等も列席あり先ず杉本直形氏發企人を代表して開會の挨拶をなし次いで兩畫伯を始め賛助員の席上揮毫等ありて中々の盛宴なりしが兩畫伯は當分東二ノ辻町遠藤周治氏方に滞在し大方の需めに應ずと」

この時、文邦を訪ねた日本画家の伊藤鷺城は来高前の明治 38 年（1905）に伊藤小坡と結婚しているため、池墻氏の推測どおり文邦と小坡はなんらかの形で交流、または互いに存在を認識していたと考えられる⁶。新聞記事の内容から分かるのは、両画伯が片桐文邦と今井重三郎を訪ねに来たことだけであり、伊藤鷺城の来高が伊藤小坡と関係あるものかどうかの判断材料とはならないが、当時の上越地域の美術画壇の一員として文邦が確かに存在していたことが確認できる。しかしながら、文邦の略歴については上記のことくらいしか分かっておらず、何をもとに略歴をまとめたか不明な点が多い。当時の新聞記事から読み取れる情報は多いものの、根拠に乏しい部分もあるため、今後も調査を要する。

2 片桐文邦が模写した画譜について

今回、文邦が模写をするにあたって参照した画譜と判明したのは、冊子状に綴じられた片桐文邦筆「今尾景年『景年花鳥画譜』模写」2冊と片桐文邦筆「長谷川契華『契花百菊』模写」1冊の資料である。以下、文邦が模写した画譜と文邦が参照した画譜の関係について図版とともに紹介したい。

（1）片桐文邦筆「今尾景年『景年花鳥画譜』模写」2冊

（2冊とも縦 38.5 cm、横 27.5 cm。一部折り込んで綴じられ、寸法の異なるものがある。）

このうち片桐文邦筆「今尾景年『景年花鳥画譜』模写」には、四季折々の草花と鳥の組み合わせが彩色されて描かれている。画面の左側にはそれぞれ画題となった草花と鳥の名前が記されており、1冊目に 32 図、2冊目に 34 図描かれている。

花鳥画は、古くより多くの絵師によって描かれ続けた画題である。花鳥画を描いた写生画譜は江戸時代頃から盛んに制作されており、明治時代には観察に基づく写実的な表現で描かれたものが登場した。これらの画譜は眺めて楽しむだけでなく、習画の手本として用いられた。

文邦の模写は、画面が区切られた空間のなかに対象を破綻なく配置しており、左側に草花と鳥の名前が数字とともに書かれていることから、文邦自身が見た自然の風景を写生したものというより、他の画家が描いた画譜などを参照して模写したものである可能性が高いと推測した。描かれた画題や構図を基に調査したところ、今尾景年（1845-1924）が手掛けた『景年花鳥画譜』

⁶ 展覧会図録『伊藤小坡とその時代』（桑名市博物館、2009 年）

を模写したものと判明した⁷。文邦が模写した『景年花鳥画譜』については、【表1】に片桐文邦筆「今尾景年『景年花鳥画譜』模写一覧」としてまとめ、今回は一部の図版のみ掲載する（図1-a～4-b 参照）。

今尾景年は、明治時代から大正時代に活躍した京都画壇を代表する日本画家の一人で、写生に基づいた精緻な花鳥画を多く残したことで知られる⁸。『景年花鳥画譜』は明治24年（1891）から翌25年にかけて、京都の呉服商千總の12代当主西村總左衛門が出資し、発行された多色刷木版画の花鳥画譜である。発行者は山田芸艸堂（現在の芸艸堂）、彫刻師は田中治郎吉、摺師は三木仁三郎によって制作された。春・夏・秋・冬の4部構成全134図からなり、各図に四季折々の草花や鳥が鮮やかに描かれている。

文邦が描いた模写を『景年花鳥画譜』の図と照らし合わせたところ、1冊目が「夏之部」、2冊目が「冬之部」を模写したことが判明した。「夏之部」、「冬之部」とともに全図を模写し、「夏之部」は綴り順も全く同じであった。模写という性質上、表現から文邦らしさを求めるのは難しいが、全体的に『景年花鳥画譜』と比べて細部を簡略して描いている。しかし、鳥の羽根や花びらの描写などから『景年花鳥画譜』を正確に写し取ろうという意識が看取され、本資料は絵画学習として模写したものと評価できる⁹。

⁷ 『景年花鳥画譜』は国立国会図書館 HP 上でデジタルコレクションとして画像が公開されている。（2025年3月21日閲覧）

本文に掲載の図版は、国立国会図書館デジタルコレクションで公開されている画像のうち、今尾景年『景年花鳥画譜面』「夏之部」と「冬之部」の画像を使用した。

今尾景年『景年花鳥画譜 春之部』 <https://dl.ndl.go.jp/pid/13128902>

今尾景年『景年花鳥画譜 夏之部』 <https://dl.ndl.go.jp/pid/13127862>

今尾景年『景年花鳥画譜 秋之部』 <https://dl.ndl.go.jp/pid/13127863>

今尾景年『景年花鳥画譜 冬之部』 <https://dl.ndl.go.jp/pid/13127864>

⁸ 「没後一〇〇年 今尾景年展 精緻なる花鳥画」（会期：2025年1月11日～3月9日）が開催され、『景年花鳥画譜』も展示された。

⁹ 村上敬「《今尾景年先生花鳥粉本》（関西大学図書館蔵）」（『関西大学博物館紀要』第23号所収、関西大学博物館、2017年）では、関西大学図書館が所蔵している《今尾景年先生花鳥粉本》について、「確泉」なる人物が『景年花鳥画譜』を模写した資料が紹介されている。このように、『景年花鳥画譜』は絵画学習の手本として模写された。



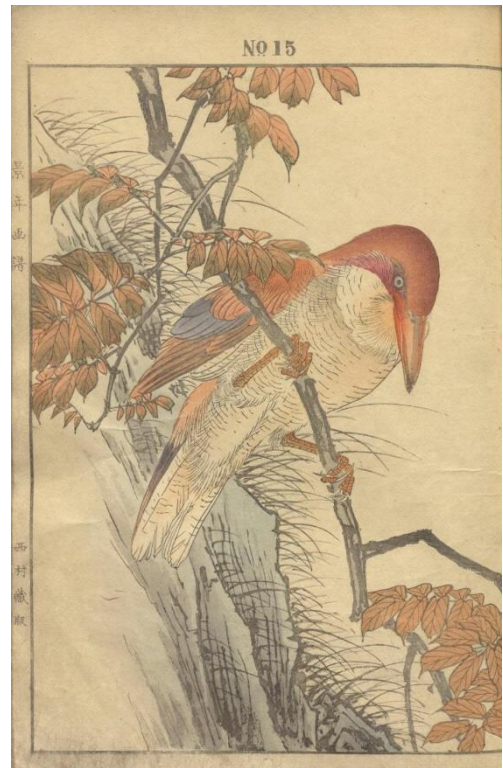
【図 1-a】片桐文邦「冬菊、紫金牛、鷓鴣」



【図 1-b】今尾景年「冬菊、紫金牛、鷓鴣」



【図 2-a】片桐文邦「ハゼ 翡翠」



【図 2-b】今尾景年「ハゼ 翡翠」



【図3-a】片桐文邦「廿八 棣棠花 コバタン」



【図3-b】今尾景年「棣棠花 コバン」



【図4-a】片桐文邦「三拾 百日紅 コルリ」



【図4-b】今尾景年「百日紅 コルリ」

(2) 片桐文邦筆「長谷川契華『契花百菊』模写」1冊（縦 38.0 cm、横 27.5 cm）

片桐文邦筆「長谷川契華『契花百菊』模写」は、多種多様な菊が品種名と一緒に描かれたもので、菊の花ばかり 60 図描かれている。そのうち、23 図は花の部分だけを下地として白で彩色したもので、2 図はそれに加えて草の部分だけを彩色したものである。また、全く何も描かれず、白紙のものも一緒に綴じられている。部分的に彩色された図のなかには、彩色しているものと同図のものもあり、練習のために何枚も描いたと考えられる。未彩色や白紙の図は、模写の途中で事情により最後まで完成しなかったものか、わざと塗り残したものか、綴じた段階では白紙のものに描く予定があったのかなど判然としない。

先に紹介した片桐文邦筆「今尾景年『花鳥画譜』模写」と同様に、片桐文邦筆「長谷川契華『契花百菊』模写」は、描かれる菊の描き方が統一され、かつ画面の左右に菊の品種が書かれていることから、画譜などを参照して模写したものと推測した。植物画譜のなかでも、菊が描かれた資料を調査したところ、明治時代後期に京都で活動した長谷川契華が手掛けた『契花百菊』を模写したものと判明した¹⁰。文邦が模写した『契花百菊』については、【表 2】に片桐文邦筆「長谷川契華『契花百菊』模写一覧」としてまとめ、今回は一部の図版のみ掲載する（図 5-a～7-c 参照）。

長谷川契華『契花百菊』は、明治 26 年（1893）に発行された多色刷木版画の植物図譜である。発行者は田中治兵衛（文求堂）と山田直三郎（芸艸堂）、印刷者は鳥居又七、彫刻師は西村

¹⁰ 『契花百菊』（全 3 巻）は国立国会図書館 HP 上でデジタルコレクションとして画像が公開されているが、全てモノクロ画像である（2025 年 3 月 21 日閲覧）。

長谷川契華『契花百菊 卷之一』 <https://dl.ndl.go.jp/pid/850409>

長谷川契華『契花百菊 卷之弐』 <https://dl.ndl.go.jp/pid/850410>

長谷川契華『契花百菊 卷之三』 <https://dl.ndl.go.jp/pid/850411>

このほか、慶応義塾大学メディアセンターのデジタルコレクションやアメリカのスミソニアン博物館の HP では、カラー画像が公開されている。ただし、それぞれ欠巻がある。

（2025 年 3 月 21 日閲覧）。

本文に掲載の図版は、スミソニアン博物館で公開されている画像のうち、長谷川契華『契花百菊』「卷之弐」と「卷之三」の画像を使用した。

慶応義塾大学メディアセンター デジタルコレクション

[契花百菊] 3 巻存巻 1, 2 <https://dcollections.lib.keio.ac.jp/ja/aramata/219>

Smithsonian Museum INTERNET ARCHIVE

Keika hyakugiku by Hasegawa, Keika v. 2（長谷川契華『契花百菊』卷之弐）

<https://archive.org/details/keikahyakugikuv2hase/page/1/mode/2up>

Keika hyakugiku by Hasegawa, Keika v. 3（長谷川契華『契花百菊』卷之三）

<https://archive.org/details/keikahyakugikuv3hase/page/1/mode/2up>

金吉、摺師は山崎安太郎、製本師は本田市治郎によって制作された。全3巻75図からなり、多種多様な菊を鮮やかに描いた画面の左右端には品種名が書かれている。

文邦が描いた模写を『契花百菊』の図と照らし合わせたところ、「巻之一」が16図、「巻之弐」が24図描かれており、「巻之三」の模写は1図もなかった。模写した図のうち、「松之雪」(図5-a)では『契花百菊』の「松之雪」(図5-b)と比べて葉の部分がとても濃い緑で彩色されており、せつかく描かれた葉脈が沈んで見える。また、菊の花は小ぶりに描かれ、白い菊の輪郭は墨で薄くぼかして彩色されている。「隈取り」と呼ばれる日本画の技法を取り入れることで菊の存在感が強くなり、立体感や奥行きが表現されている。一方で、「鳳凰殿」(図6-a)では「松之雪」に比べて葉の彩色は『契花百菊』に近く、部分的にぼかして濃淡をつけている。しかし、花びらの表現を観察すると、線描が省略され、裏返った部分が描かれず濃い色で塗りつぶされているなど、『契花百菊』の「鳳凰殿」(図6-b)と比べて花の生命感が失われたように感じられる。また、「虎髯」のように彩色図(図7-a)と部分的に彩色された図(図7-b)の両方が描かれた画題もある。文邦の彩色図を『契花百菊』の「虎髯」(図7-c)と比べると、放射状に広がる花びらの表現など、精緻に描き込まれているのは『契花百菊』のほうである。一方で、文邦の模写は花の中心部分を濃くして濃淡をつけるなど、彩色に工夫が見られる。

このように一部ではあるものの、文邦が描いた図と『契花百菊』の描写を比較することで、模写をする上で省略した部分や彩色の違いから、文邦が多彩な手法を使い分けていたことが看取される。しかし、図によって塗り方が大きく異なるものもあり、こういった意図で塗り分けていたのかなど疑問が残る。

片桐文邦筆「長谷川契華『契花百菊』模写」は、先に紹介した片桐文邦筆「今尾景年『景年花鳥画譜』模写」と同様に、絵画学習の過程で描かれた資料と評価できる。詳細は明らかではないが、文邦は京都時代に四条派の日本画家である森川曾文や長谷川玉純に師事していたとされる。両者は京都府画学校に出仕していたこともあり、設立に深く関わった京都画壇の有力画家・今尾景年が手掛けた画譜に文邦が触れる機会があったものと考えられる。また、当時は画譜や粉本を用いた模写が画技向上のために行われており、絵画学習の一環として模写したと考える方が自然である。本画制作を意識した習画ではなく、あくまで模写という性質上、署名や落款もない。このため、模写を行ったのが京都の修行時代なのか、後年の高田に移り住んでからなのかなど、制作年については不明である。しかしながら、片桐家で長い間大事にされてきた資料であることは変わらない。



【図 5-a】片桐文邦「松之雪」



【図 5-b】長谷川契花「松之雪」



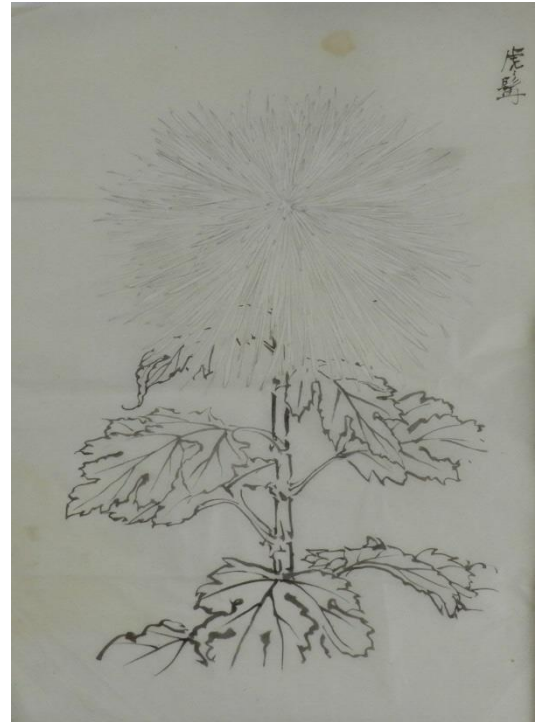
【図 6-a】片桐文邦「鳳凰殿」



【図 6-b】長谷川契華「鳳凰殿」



【図 7-a】片桐文邦「虎髯」



【図 7-b】片桐文邦「虎髯」(部分彩色図)



【図 7-c】長谷川契華「虎髯」

おわりに

本稿では、日本画家・片桐文邦が模写した資料について、文邦自身が描いた画譜と模写した画譜との関係を中心に紹介した。文邦が描いた2種類の模写は、今尾景年『景年花鳥画譜』と長谷川契華『契花百菊』を手本とし、それぞれの図を模写して画譜を制作したもので、文邦の絵画学習の具体的な事例が分かる資料として評価できる。

一方で、片桐文邦に関する美術史上の研究は少なく、先行研究においても文邦の簡単な略歴とレルヒとの交流について言及するにとどまっている。これは、文邦の画業が京都の修行時代など、足跡が明らかにされていないことが多いためと考えられる。また、上越市（当館や日本スキー発祥記念館）で収蔵している資料についても、制作年代が不明なものが多いなど、研究が進んでいるとはいえない。

本資料の寄贈後、片桐家から追加資料として、文邦について掲載された新聞記事のスクラップをご寄贈いただいた。このスクラップは記事部分のみを切り取って貼ったものであり、掲載紙や年月日の部分は確認できないものの、記事の内容から久留米や仙台へ遊歴した時の様子が窺える。表題から文邦の活動時期の地元紙を丹念に調査すれば、高田にいた時の足跡が辿れそうである。当館では、片桐文邦が耶馬溪（大分県）を描いた掛軸の「耶摩溪錦秋」を所蔵しており、作品の制作年代を特定することが期待できる。さらに、日本スキー発祥記念館では、文邦がレルヒに贈り、長年レルヒの自宅で大切に飾られていた「春日山松籟」などの文邦自筆の絵画資料や書簡類を所蔵している。

今回は2つの資料に絞って整理を行ったが、他にも画題や制作年が不明なものが未整理状態で残っている。今後も資料整理を続け、日本画家・片桐文邦について新たな成果を掘り起こしていきたい。

（上越市立歴史博物館 学芸員）